

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	中野 真備
論文題目	インドネシア・バンガイ諸島サマ人の漁撈における環境認識		
(論文内容の要旨)			
<p>サマあるいはバジャウと呼ばれる集団 (以下、サマ人) は、フィリピン南部、マレーシア・サバ州、インドネシア東部を中心とする東南アジア3か国にまたがって拡散居住する海洋民であるとされる。サマ人については、その歴史的形成過程や社会学的研究に加え、漁撈活動や環境認識の研究もおこなわれてきたが、それらはサンゴ礁に面した汀線部における一面的な調査に限られてきた。そこで本研究は、サンゴ礁のない浅海域から外洋域で漁撈を行う、インドネシア・バンガイ諸島のサマ人における調査から、(1) 海上ナビゲーションとその実践における海上景観の特徴、(2) 海上ナビゲーションが求められる漁撈における環境認識、(3) バンガイ諸島サマ人の漁撈における民俗分類の意味、の3点を明らかにし、彼らの外洋漁撈における環境認識構造の総合的把握を目的とした。</p> <p>第1章では、環境認識に関する先行研究とサマ人に関する先行研究を概観し、海をめぐる民俗分類の研究では生物や無機的自然物、空間がそれぞれ独立したものとして研究される傾向があったこと、外洋漁撈を対象とした環境認識の研究が不足していたこと、サマ人の研究における漁撈活動や環境認識に関する実証的研究が不足していたことを指摘した。そのうえで、本研究の視座は、バンガイ諸島サマ人の漁撈における環境認識を、浅海・外洋域で必要となる空間認識や、生物・自然物・空間の民俗分類から明らかにすることであるとした。</p> <p>第2章では、調査地域であるバンガイ諸島について概観し、この地域はサマ人に関する先行研究と比較してサンゴ礁がきわめて小さく、浅海から外洋域にかけて漁撈が行われるという生態環境条件と、サマ諸語の中でもスラウェシ系サマ語を使うという社会言語学的特徴があることを指摘した。</p> <p>第3章では、バンガイ諸島の1村における調査から、漁撈活動を明らかにした。先行研究と比較した結果、(1) 沿岸から外洋域における釣り漁が頻繁であること、(2) 漁師は浅海から外洋域にいても遠方の目標物を頼りにしており、すなわち「外洋性閉鎖系」とよぶべき海上景観の中で活動すること、(3) 漁師が海上移動する時には複数の位置特定技術を多角的に用いること、という特徴が見いだされた。</p> <p>第4章では、バンガイ諸島サマ人の漁師は、集落を出て目指す漁場に近づくにつれ、海中・海上・上空の様々な情報を参照するようになり、彼らの認知・記憶の層が分厚くなることが明らかになった。他のサマ人の空間認識が面的あるいは線的であるとされてきたのに対して、バンガイ諸島サマ人は漁場という中心に対して三次元的な</p>			

空間認識の構造を持つとみなすことができ、「スポット的な空間認識」と呼ぶことができる。この空間認識は、浅海・外洋で漁を行うために発達したと考えられる。

第5章では、魚類・漁場・目標物に対する民俗分類や命名方法の分析を行った。その結果、それぞれの命名は漁師の視点による海上景観に基づくものであったが、それに加えて他の集団からの影響を示唆する部分もあった。さらに分析すると、魚類、漁場、目標物の命名は必ずしも相互に影響しあうとは限らないが、自然（生物および目標物としての無機的自然）と空間（漁場）認知の関係としては、不可分な関係にあることが明らかになった。

第6章では、本論文の総合的な考察を行った。先行研究における環境認識やサマ人の研究と比べ、本研究が明らかにしたことは、（1）外洋性閉鎖系の海上景観で特徴づけられるバンガイ諸島では、サマ人漁師らは複数のナビゲーション技術を臨機応変に組み合わせて用いていること、（2）人々は単に生物や空間を独立したものとして認識しているのではなく、生物・自然物・空間という要素を相互補完的に関連付けることで漁撈における「位置」を特定していること、（3）人々は命名や分類を通して、自然を利用可能なものとして文化に範疇化していることであった。本研究は、これまでの民俗分類学や民俗生物学の枠組みを超えた、海で生きる人々の生活世界を明らかにする、新たな海の民俗分類学を提起するものである。

(論文審査の結果の要旨)

サマ人は元来国家に属さず、国境をまたいで移動しながら生業を営んできたとされ、「漂海民」と呼ばれたこともある。しかし現実には、現代までに各地で杭上集落を形成し、国籍を持ち、汀線部に暮らす集団となっている。これまでサマ人の環境認識に関する主な研究は、サンゴ礁域に形成された杭上集落に基づいていたことから、サンゴ礁域から沿岸にかけての漁撈についてのものであった。それは、サマ人の歴史的過程や地理的な広がりから考えると、彼らの環境認識の一部を捉えてきたにすぎないことを意味する。他方、定住化して以降、船外機の導入など漁具・漁法の機械化や現代化も進んだ。

本研究はこれらの背景を踏まえて、浅海域から外洋域にかけての移動と漁撈におけるサマ人の環境認識を、現代の漁撈活動についての詳細な調査から、明らかにするものである。本研究の優れている点は、以下にまとめることができる。

第一は、インドネシア東部バンガイ諸島に定住化したサマ人の漁撈について、詳細な記録を残したことである。漁具については計測した数値とともに描画され、素材、使用方法などの情報と共に整理され、記録されている。また、膨大な魚名一覧は、方名ごとに学名が同定されており、漁撈の記録であるだけでなく、現在のバンガイ諸島近辺の海洋生態環境の記録としても貴重である。このような民俗学のおよび生物学的記録は、次世代のバンガイ諸島サマ人に伝えられるべき価値のあるものであり、また他地域の研究者が漁法や環境についての比較研究をする際にも貴重な資料となる。

第二は、民俗分類学に新たな視点をもたらしたことである。民俗分類学は、主に生物や無機質な物についての分類を対象にしてきた。一方、漁場の命名や、漁師が目標とする対象物の利用方法は、これまで分類学としてみなされることは稀であり、生業研究や生態人類学で扱われてきた。本論文は、サマ人が漁撈で用いる認識を、その物の性質に関わらず全て分類・命名という観点から分析し、民俗分類学として考察を深めた。その結果、魚類、漁場、目標物の間に命名規則の相互作用があることが明らかになるなど、民俗分類学に新たな展開をもたらされた。

第三は、漁撈社会の環境認識についての考察を深め、新たな分析概念とともに、その構造を明らかにしたことである。漁師はさまざまな知識や経験を活かして、漁撈を行っているが、本論文は漁師による実践のあり方は、漁場の中心点との距離関係によって変化するとし、それを「スポット的」という概念によって説明した。また、海域空間を表す閉鎖系漁場（閉鎖性海域）の用語を拡大的に使い、浅海域を含む外洋域と閉鎖系を掛け合わせた海上景観として「外洋性閉鎖系」という分析枠組みを提示した。これらの分析をふくめて、論文全体を通して、人々による環境認識や文化のあり方について新たな視点をもたらした。

これらの研究を通して、本論文はこれまでに積み上げられたサマ人研究で欠けていた

部分を補完した上に、東部インドネシア地域研究に新たな展開をもたらし、さらに民俗分類学や民族生物学にも貢献をなしたことから、高く評価されるものである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2022年1月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。